研究ノート

朝鮮半島における在来犂の成立過程に関する試論

河　野　通　明
KONO Michiaki
神奈川大学　名誉教授

はじめに

朝鮮半島在来犂の成立過程に挑戦　これまで日本の在来犂調査から得られたデータをもとに、7世紀の大化改新政府による長床犂導入政策と、その各地での受容の実体解明を続けてきたが、その様相がかなり明らかになってきたので（河野 2004、2007、2009、2011a、2011b、2015）、いまその1段階前の渡来人によって牛と犂が日本列島に持ち込まれた5世紀史の解明に取り組み始めたところである。日本列島への犂耕の伝来事情を解明するとなれば、もう一つ上流の朝鮮半島における犂耕の開始と展開が検討課題となるが、これに関しては河野「東アジアにおける犂耕の展開についての試論」（1996）で大雑把な見通しを立て、この分野での数少ない成果として評価はされているものの、何しろ4半世紀前の論文であり修正すべき点も多い。そこで今日の時点であらためて朝鮮半島における犂耕の伝来時期と朝鮮半島在来犂の成立事情を考えてみることにした。

ところで朝鮮半島在来犂に関しては戦前の朝鮮総督府編『朝鮮ノ在来農具』（1925）、戦後には金光彦『韓国の農機具』（1969）、『韓国農機具攷』（1986）、『犂研究』（2010）があり、新納豊「朝鮮半島における在来犂とその分布」（1998）は複雑多様な朝鮮半島犂の5類型を提示して総括的把握を試みている。また中国犂の朝鮮半島伝来に関しては渡部武『画像が語る中国の古代』（1991）が漢代墓の画像石の収集・分析からアプローチしている。幸い2008年に開かれた神奈川大学でのシンポジウム「犂から見たアジアと日本」では渡部武「中国漢代画像石に見られる犂型の諸問題」、新納豊「朝鮮・在来犂の分布と歴史的展開」の報告がなされ『歴史と民俗』26（2010）に収録されていて、これが日本語文献での最新の成果となっている。そこで本稿では諸著に掲載された画像を参照しつつ、渡部論文と新納論文の検討を軸に河野の日本の在来犂研究の成果を掛け合わせて、中国から朝鮮半島への犂の伝来と、それに刺激されての朝鮮半島在来犂誕生の経緯を跡づけることにした。

犂型と部品名の概観　なお犂型の展開を論じるため、読者には馴染みの薄い犂の部品名が頻出することになるので、図1、図2にしたがって犂の犂型と部品名を概観しておきたい。

犂は西アジアで二頭引き犂として誕生した後、シルクロード経由で中国に入った。中国に入った二頭引き犂は朝鮮半島北部にも伝わり、その後中国本土と朝鮮半島で同時並行でそれぞれの南部に伝わっていくが、家畜頭数の少ない南部に伝播する過程でそれぞれ一頭引き化し（河野 1996）、その朝鮮半島の一頭引き犂が渡来人によって牛とともに日本列島に持ち込まれたことで日本の犂耕が始まった。したがって朝鮮半島にはどんな形の中国犂が持ち込まれ、それがどういう経過で一頭引き化して朝鮮半島在来犂が生まれたのかは、日本の在来犂研究者にとっても重大な関心事であり、その過程を朝鮮半島の在来犂の形態に残された痕跡を読み解くことで復原しようというのが本稿のねらいである。

図1Aは華北山東省の後漢墓の画像石に描かれた二頭引き犂で、渡部武によればこのタイプが朝鮮半島に持ち込まれたという。2頭の牛の首に長い横棒を渡して首木とし、長い直棒犂轅を首木に繋いで犂を引かせるものである。B図は鎌倉時代の「松崎天神縁起絵

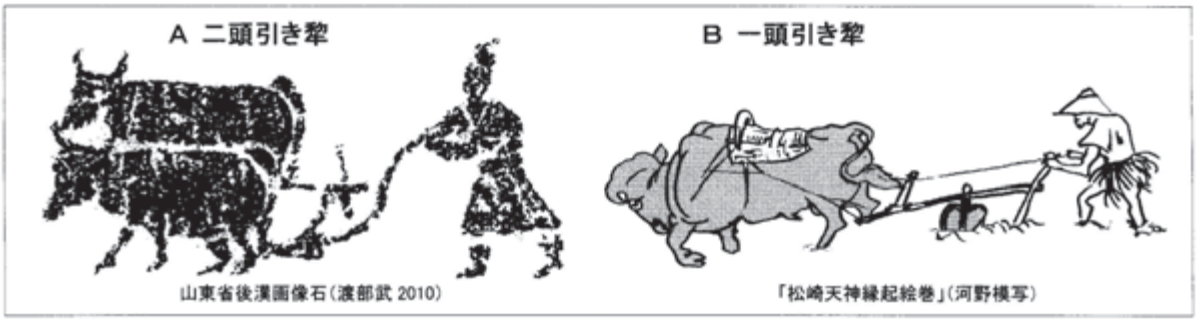


図1 二頭引き犂 と 一頭引き犂

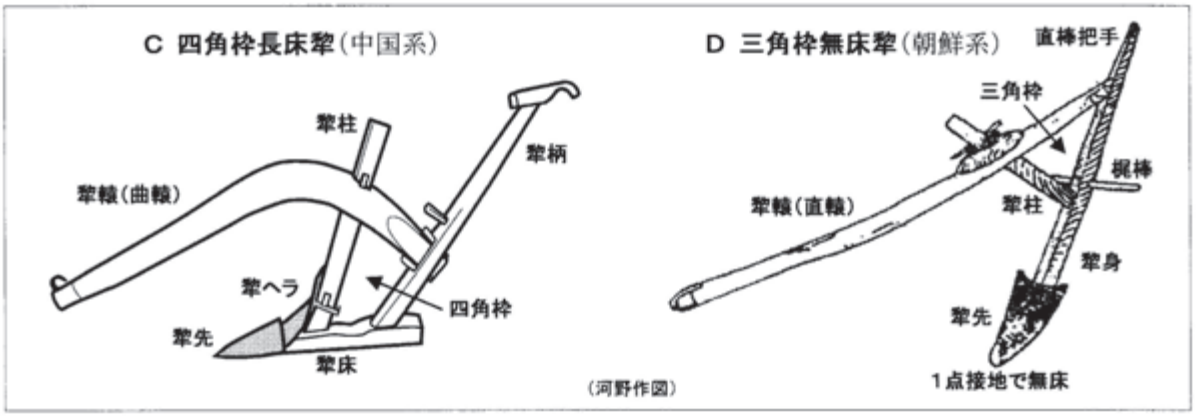


図2 四角枠長床犂 と 三角枠無床犂

巻」に描かれた一頭引き犂で、鞍に繋いだ左右の引綱を「尻枷」と呼ばれる横木の両端に結びつけ、尻枷の中点に犂轅の先端を結びつけて犂を引かせている。この便利な尻枷は中国で二頭引き犂が一頭引き犂化する過程で開発されたもので、大化改新政府の長床犂導入政策にもとづく政府モデル犂の全国配付時にセットとして配付されたと考えられ、渡来人が持ち込んで７世紀前半まで各地で使われていたと考えられる半サイズの「幅木」は調査した限りでは九州から関東までのどこにも残っていない。

図２は中国の四角枠長床犂と朝鮮半島の三角枠無床犂を並べて部品名を記したもので、Ｃ図は中国の長江流域江南地方の犂で、牛に向かって伸びる「犂轅」、犂体を受けて地面を擦りながら走行する「犂床」、犂轅と犂床を繋ぐ「犂柱」、犂床の後端から斜め後方に伸びて上端は把手となる「犂柄」の四つの部材からなり、組み合わせると四角枠が現れるので「四角枠犂」であり、犂床は 70 ～ 90cmほどの長い「長床犂」で、併せて「四角枠長床犂」となる。四角枠長床犂には犂先で耕起された土塊を左か右に返して放擲する犂ヘラが付き、中国は進行方向の右側に返す「右反転」で、Ｃ図の犂は犂ヘラの上部が右に捻れた「曲面ヘラ」となっている。また犂轅は犂柱との交点の前で下方に曲がった「曲轅」で、牽引点を下げることで走行中の犂体の前のめりを抑えて定姿勢走行ができるようにした「曲轅犂」である。

Ｄ図は朝鮮半島の中・南部で広く使われているクッチェンイと呼ぶ犂で、牛に向かって真っ直ぐに伸びる「犂轅」、先端に犂先を嵌め後端は細めて直棒把手となる「犂身」、犂轅と犂身を繋ぐ「犂柱」の三つの部材を組み合わせるので「三角枠犂」となり、犂床がなく、犂先の先端で接地するので「無床犂」であり、併せて「三角枠無床犂」と呼ばれる。このクッチェンイには犂ヘラは付かない。

また犂轅は直棒の「直轅」で「直轅犂」であり、前方に向かって下降する「下降直轅」である。

朝鮮半島の一頭引き犂にはもう１種類ヂェンギと呼ぶ犂ヘラ付き犂があり本文で取り上げるが、このヂェンギの犂ヘラは耕起した土塊を左側に放擲する「左反転」の「平面ヘラ」であり、日本の在来犂も左

反転の平面ヘラなので、日本の犂耕は朝鮮系渡来人の持ち込みに始まったことを物語る痕跡資料となっている。

なお「二頭引き犂」「一頭引き犂」「漢の四郡」などは熟語なので漢数字を用いている。

これで準備は整ったので本文に進むことにしよう。

Ⅰ　新納論文による朝鮮半島在来犂5類型と日本伝来機種の絞り込み

新納豊「朝鮮・在来犂の分布と歴史的展開」(1998)は、韓国での金光彦による在来犂調査（1969)、北朝鮮でのチョン・シギョンによる調査（1960)、それに1900年以降の朝鮮総督府関係の日本人による調査報告書などを総合して朝鮮半島の在来犂を5類型に分類し、その分布図を作成したもので、以下図3にもとづいて新納氏の5分類の犂について見ていこう。

まず図3を概観しておくと、右側にはA～Eの5類型を図示し、左側には犂型ごとの分布図を掲げ、その下に朝鮮半島の道名図を配して新納論文を読み進むための手掛かりとした。またFとGは新納論文に述べられた内容を表にしたもので、随時この表を参照して読んでいただければ理解が深まるであろう。では5類型犂をAから順に見ていこう。なおヂェンギという言葉は犂一般を表す総称としても使われているようだが、本稿では5分類のなかの一つの類型名として用いることにする。

A　ヨンヂャン　大同江以北の平安南道、平安北道一帯に分布する二頭引きの大型の犂で、犂ヘラはなく、極めて単純かつ堅固に作られている。犂身は短く、犂先は大型で重量18kgほど、把手は犂身の上端に穴をあけて太い横棒を差し込み、ここを両手で押さえ込みつつ硬い畑地を犂割る形で畦を立てるが、また犂先を傾ける程度によって土塊の放擲を小さく、あるいは大きくできる。犂先だけでなく犂体そのものが大型かつ重量を持つのは、牽引時に犂体の浮き上がりを抑制するためとも思われる。

B　ボヨンヂャン　平安両道、黄海道、江原道に分布し、漢江以北の京畿道の広範囲に及ぶ。ボヨンヂャンはヨンヂャンに犂ヘラが付加された犂といえる。二頭引きで犂先も大きく、犂ヘラを持つ。また犂ヘラを助けて高畦にする「ボキ」、および深度調節装置の「テッパ」がつく。

C　カデギ　咸鏡南道・咸鏡北道および江原道に分布する二頭引きの大型犂で犂ヘラはない。図は咸鏡北道地域の典型的なカデギであるが、極めて特異な形態をしている。犂体の大きさの割に犂先は小さく、それを補完する「プンサル」と呼ばれる木枠がつく。小さめの犂先で左右に起こした土塊を、60～80cmのプンサルによって押し上げて高畦をつくる。

D　ヂェンギ　京畿道、江原道以南の南部地方および黄海道の沿岸地域に分布する。一頭引きで犂ヘラをもち、水田での平面耕に適している。やや曲がりのある犂身と長めの曲轅およびその両者をつなぐ犂柱によって三角枠型をなしている。犂ヘラは日本と同様に左反転である。犂轅は長く牽引点を下げるために曲轅となっているのが基本型である。

E　クッチェンイ　京畿道、江原道以南の畑作地帯や山間部に分布する一頭引き犂で犂ヘラはなく、耕地が狭く、傾斜の急な畑地の耕起に適している。比較的単純な作りで、犂柱は犂轅を貫き、クサビを前後に動かすことで犂轅と犂身間の角度を調節し、耕地の形状や深・浅耕にも対応する。把手は犂身の中間やや上部に横棒をかんざし状に差し込み、犂身上端とこの把手を用いて右傾にも左傾にも調整が可能である。

下線を引いた部分については後にコメントするとして、F表とG表は文章記述による新納分類をより明快に可視化するために表にしたもので、F表では北部での二頭引き犂は南部では一頭引き犂に変わることが明確に読み取れる。これには遊牧社会に近く家畜頭数が多い北部と、もともと牛馬が居なかった南部との歴史地理的背景がベースにある。G表は成立年代で分けたもので、新納論文によってカデギとボヨンヂャンが15世紀以降の成立であることがはっきりしたので、中国から朝鮮半島への犂耕の伝来を扱う本稿での対象は、古代に成立したヨンヂャン・クッチェンイ・ヂェンギの3類型で、このうちクッチェンイはヨンヂャンの南下伝播の過程で一頭引き化した派生型なので、中国から朝鮮半島に伝来した華北犂に倣って韓人の手で創られたのは二頭引き犂のヨンヂャンと一頭引き犂の

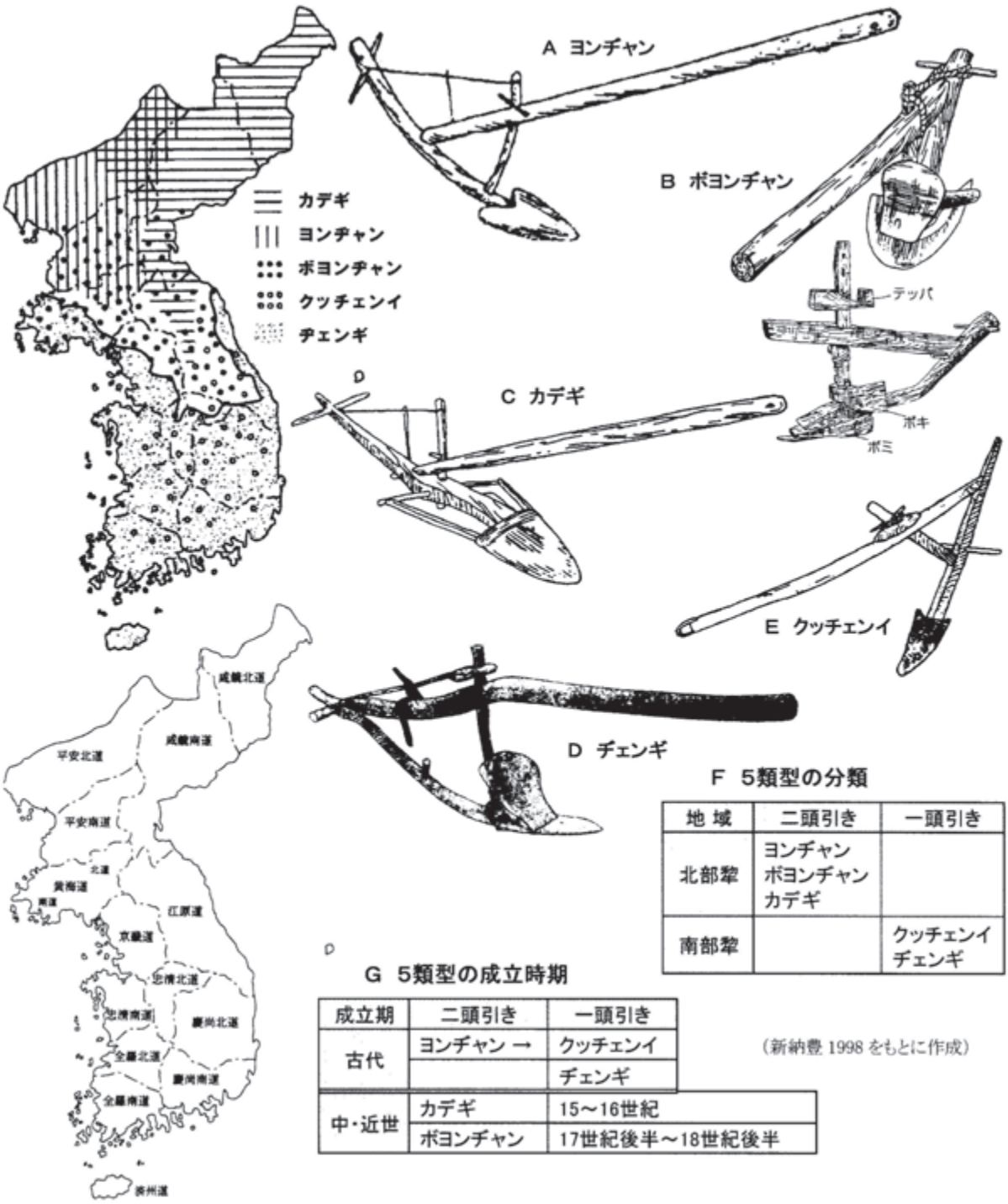


図3 新納分類による朝鮮半島犂の5類型と分布図

ヂェンギの２類型となる。そしてヨンヂャンとヂェンギは牽引頭数も形態もまったく異なることからして、その祖型となる中国華北犂も二つの異なる地域からの２系統の持ち込みがあったと想定することができる。

なお新納氏はヨンヂャンには犂ヘラがないと断言しているが、2006 年に江原道で見た犂は全体形はヨンヂャンながら犂ヘラが付いていた。新納氏の説明ではヨンヂャンに犂ヘラが付けばボヨンヂャンとなるが、江原道犂はテッパもボキ・ボミも付かない素直な三角枠犂だったので、ヨンヂャンには犂ヘラなしタイプと犂ヘラ付きタイプがあるとしておく方が無難ではないか。

なお済州島には本土と少し形が異なるヂェンギが使われていて提灯半割形の平面ヘラが付けられている

が、このタイプの犂ヘラは日本の在来犂には見られず、また済州島からの渡来人の来住記録もないので、今回の考察からは外すことにした。

ではヨンヂャンやヂェンギ誕生の前提となる中国犂の朝鮮半島伝来事情に踏み込むことにしよう。

Ⅱ　中国から朝鮮半島への犂耕伝来時期の絞り込み

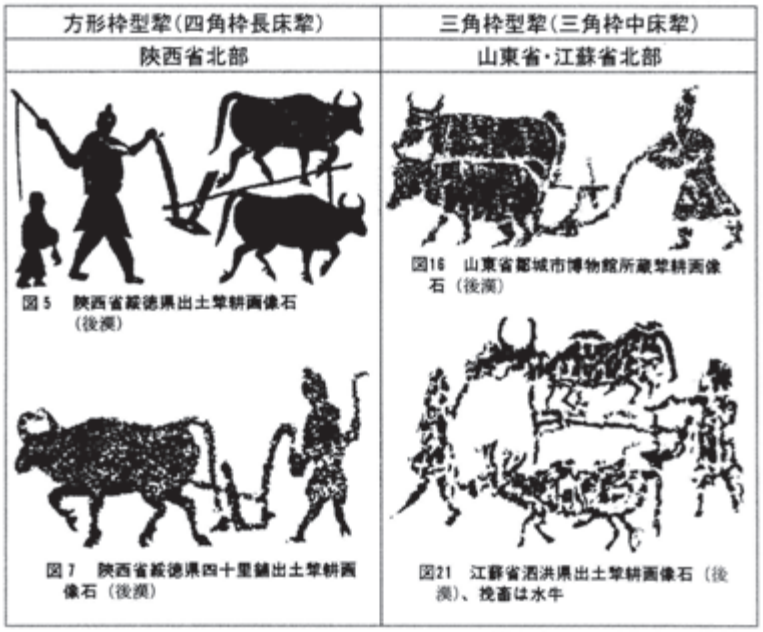
漢人の朝鮮半島大挙移住　ところで中国犂が朝鮮半島に伝わるとはどんな場面で起きるのか。宝石や貴金属など装飾品なら、交易や外交ルートでの献上などによってモノ単体での伝播はありうるが、犂は生産用具であり、牛の飼育から犂の操作法までが一体化した大きな技術体系の一環であって、仮に犂単体が交易を通して朝鮮半島に伝わったとしても使われることもなく放置されたままになるであろう。そこで中国犂が朝鮮半島に伝わり定着する条件は、漢人が朝鮮半島に大規模移住して漢人農場を開き、その後も永く住み続けるような場面に限られることになる。その条件を歴史のなかで探せば、紀元前194年に戦国七雄の一つであった燕の遺臣の衛満が千余人を率いて朝鮮半島に亡命、箕氏朝鮮の王を追い出して朝鮮王を名乗り王険(平壌)に都した衛氏朝鮮と、前108年に漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼして楽浪・真番・臨屯・玄菟郡を設置した、漢の四郡設置にともなう漢人の大規模移住であろう。

このうち衛氏朝鮮は3代で86年続いたが、当初の亡命移住は千余人という小さな規模だったこともあって支配領域は広くはなく、朝鮮半島全土への影響はほとんどなかったと考えられるのに対して、漢の四郡の設置の際には中国本土から多くの官吏・商人らが移住し、楽浪遺跡の墳墓からは印章や金・銀・銅・玉製品・陶器・漆器など楽浪文化の遺物が出土している（『日本史広辞典』1997)。その四郡のうち真番・臨屯の2郡は設置26年後の前82年に廃されて楽浪・玄菟の2郡に吸収され、その玄菟郡も前75年には郡政府を遼東郡内に移すなど、現地勢力の台頭に押されて後退する流れにあったが、楽浪郡は313年に高句麗に滅ぼされるまで、421年間も漢人の朝鮮半島内生活はともかく続いたことになる。421年間は1世代30年とすれば14世代、25年と見なせば17世代にわたる長期間である。

中国は紀元前1800年に始まる夏王朝時代に宮殿を持ち、前1600年に始まる殷王朝時代には鄭州の城郭都市を持ち甲骨文字を使う文明段階に入っていて、周辺民族とは大きな文化落差が生じていた。近代ヨーロッパ諸国がアジアやアフリカ・中南米に植民地をつくったとき、ヨーロッパ人たちは植民地にヨーロッパ人町をつくり、住宅はもちろん高級家具まで本国から持ち込んで本国並みの暮らしを楽しんだが、これと同様、文明生活に慣れた漢人は移住先でも本国並みの生活を続けるために、高度な生活を支える諸職人も含めた大規模移住で乗り込んだであろう。

牛と犂を使う漢人農場の誕生　楽浪郡はじめ四郡の郡都に漢人都市ができると、その食糧需要を支えるために華北で発達した長大な耕地に二頭引き犂や耬（畜力播種機）を使って耕起・播種・覆土して効率良く粟・麦を作る漢人農場が各地の平野部につくられたと考えられる。シルクロードのオアシス都市、甘粛省の武威では前漢末つまり紀元前後の磨咀子漢墓から一頭引き犂の模型が出土していて、華北でも二頭引き犂から一頭引き犂への変化が始まっていたであろう。漢人農場には一頭引き犂も持ち込まれた可能性が高い。この漢人農場の働き手は華北から移り住んだ漢人農民が当たっていたが、時が経つにつれ賃金の安い韓人農民も徐々に増えていったと考えられる。彼らはそのなかで牛の飼養法や犂の操作を身につけていった。この犂を使いこなせる韓人農民の誕生が、やがて韓人の手による朝鮮半島在来犂開発の伏線となる。

楽浪郡の滅亡は一つの節目　313年、高句麗が楽浪郡を滅ぼすと漢人の大部分は遼東半島に去ったが、朝鮮半島から出るに当たって漢人農場主は土地や農具を韓人の豪族に売ったり農場労働者に譲って去ったので、ここから韓人農家による犂耕が一気に増えた。もちろんそれ以前にも機会を得た者が独立して犂耕農家となったケースもあったろうが、楽浪郡の滅亡事件は犂耕主体の漢人から韓人へのバトンタッチが大規模に起こったという点で、歴史の転換点となったと評価できよう。



（渡部武 2010 にもとづいて作成）

図４　渡部武による漢代画像石犂の２類型

Ⅲ　朝鮮半島に持ち込まれた山東半島の二頭引き犂

漢代華北犂の四角枠犂と三角枠型犂　先に触れた2008年シンポジウムでの渡部論文「中国漢代画像石に見られる犂型の諸問題」の核心部分が図４に示した漢代の犂の犂型にもとづく２分類で、「漢代の犂は方形枠型犂（四角枠犂）と三角枠型犂の両タイプに大別でき、前者は陝北（陝西省北部）地方、また後者は山東と蘇北（江蘇省北部）地方にそれぞれ顕著にみられる」とし、「ことに三角枠型犂タイプの犂は後世の朝鮮半島の在来犂とも深い関係にあり、相互の地域に何らかの人的あるいは技術的交流があったことは明らかである」というもので、中国犂の朝鮮半島伝来の考察には欠かせない重要論文である。その方形枠型犂と三角枠型犂の２類型を図４に示した。このうち右側の三角枠の山東・蘇北犂が朝鮮半島の在来犂に繋がるということなので、図５では三角枠犂の江蘇省後漢墓犂を取り上げて、考察することにした。

山東・蘇北犂の復原　図５には山東・江蘇画像石のなかでも図柄が明快なＡの江蘇省睢寧県後漢墓画像石を山東・蘇北犂の代表として掲げ、Ｂに犂耕部分の拡大図を掲げた。この犂耕拡大図で見ると、二頭引き犂で犂轅の上方に平行して細い線が描かれているのは手綱であろう。犂先の上に犂柱に纏わるような黒い影が見られるが、何か小枝の束のようなものを犂柱に括りつけて犂ヘラ代わりにしているのかも知れない。ただ鉄製犂ヘラのような完成した部品には見えないのでＣの復原図では省いておいた。

Ｃの山東・蘇北犂復原図は、Ｓ字形屈曲犂身を持つ三角枠中床犂で巨大な犂先を備えており、大きなＴ字形把手が付く。画像石図では操者は片手で把手を握っているが、二頭引き犂の場合は犂体の浮き上がり効果が現れるので、両手でしっかりと把手を握って抑え込むために大きな把手が必要なのだろう。

巨大犂先の成因　この巨大な犂先（大鉄鏵）については、渡部氏は北京大学の張伝璽教授の漢代の大鉄鏵は主として田間の溝渠（灌漑水路）を開くために使用された、という説を肯定的に紹介しているが、墓室の壁画は墓主の生前の生活の華やかさを称える目的で描かれるものなので、墓主の荘園的農場での粟・麦・米など主穀生産の畑や水田の犂耕が描かれるのが普通と考えられ、主穀生産の田畑の犂耕を描かずに灌漑用水路の掘削のみを描くことはまずないと見ていいのではないか。

巨大犂先は犂体の浮き上がりの抑止　犂先の巨大化は幅広の灌漑用水路を一気に掘るためではなく、犂体の浮き上がりを抑えるためと考えられる。二頭引き犂の犂体の浮き上がりは作用･反作用の法則で説明できる。耕起走行中の犂先は大きな土の抵抗力を受けるので容易に進めないが、犂轅の先端という犂体の高い位置が牛の強い力で引かれるので犂体はつまずいて前に倒れ込もうとし、犂轅の先端は首木を下に押し下げようとする。ところが二頭の牛の首に渡した首木は容易に下がらないので、その反作用で首木を中心として犂体が持ち上げられることになり、これが「二頭引き犂の犂体の浮き上がり効果」である。犂先は首木から遠い位

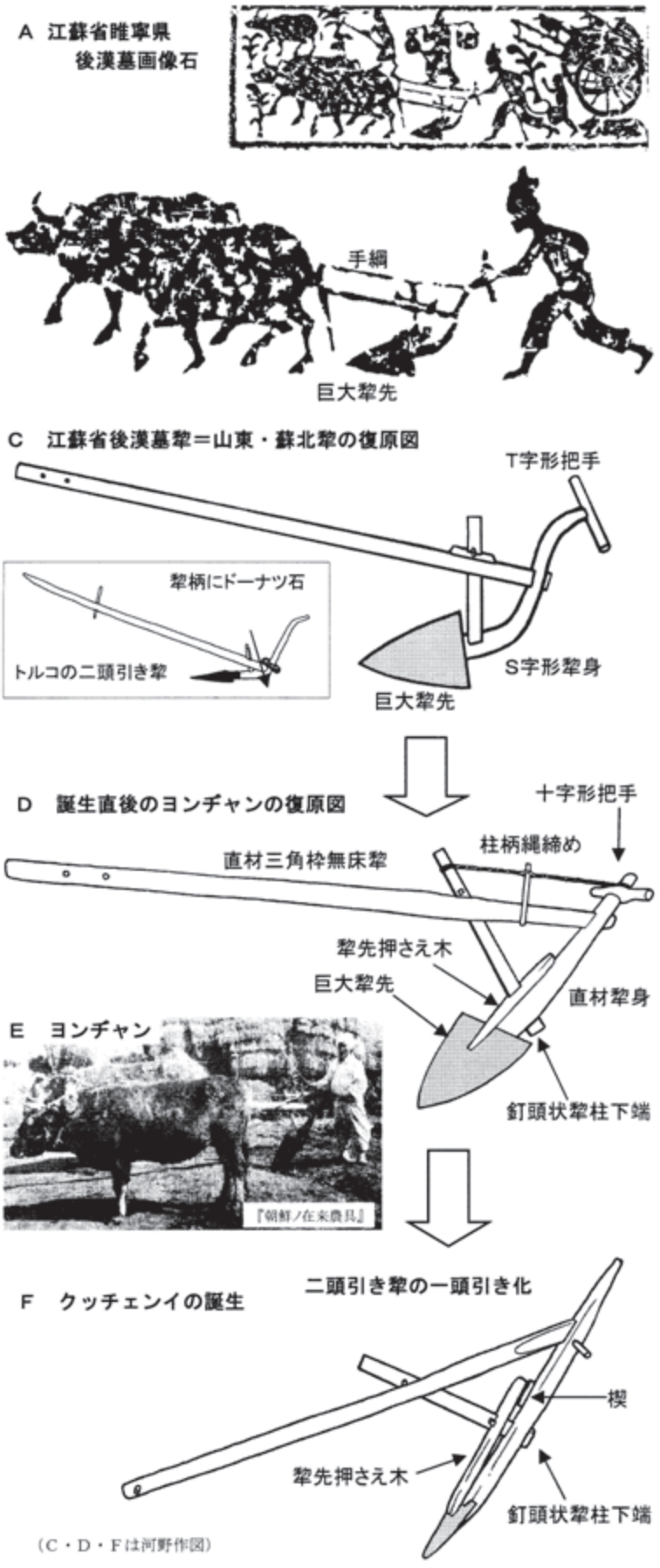


図５　ヨンヂャンとクッチェンイの誕生

置にあるので、犂先を重くすれば釣り合いの原理で効果的に抑止力がはたらいて犂体の浮き上がりを抑え込むことができる。枠内に示したのは国立民族学博物館にかつて展示されていたトルコの二頭引き犂で、犂柄に直径24㎝、厚さ19.5㎝の石のドーナツを嵌め込んで浮き上がりを防止している。渡部論文には中国雲南省のナシ族の二頭引き犂で２頭の牛の間に人が入って犂轅を押さえている写真が掲げられているが、朝鮮半島ではそうした図像や写真を見かけないのは、巨大犂先の犂体の浮き上がり抑止力がよく機能していた結果であろう。

このＣ図が山東半島から漢人が持ち込んで朝鮮半島で使い始めた犂と考えられ、朝鮮半島在来犂の巨大犂先は山東犂の巨大犂先を継承していたことになる。

Ⅳ　ヨンヂャンの誕生

直材三角枠犂ヨンヂャンの誕生

Ｄ図は枘組みが苦手な韓人農民が、漢人が使っていたＣ図の山東・蘇北犂をモデルにして自分たちの技術にもとづいて見よう見まねで製作したならどんな犂になるかを図上復原したものである。Ｃ図の山東・蘇北犂は犂身はＳ字形に曲がった複雑な形だが、加工の難しいＳ字形犂身を避けて直材に代えたため直材三角枠犂になった。枘組みが得意ではなかったので、犂柱と犂身は縄締めで固めている。Ｅ図に『朝鮮ノ在来農具』のヨンヂャンの写真を掲げたが、Ｄの復原犂

と基本的に同じ構造であり、違うのはE犂の犂柱は進化した「弧状犂柱」で誕生当初は素朴な直材犂柱だったと考えられることからすれば、D図は初代ヨンヂャンをほぼ再現していることは間違いないであろう。初代ヨンヂャンが直材三角枠犂であったことは、ヨンヂャンが後に一頭引き化して生まれたF図のクッチェンイも直材三角枠犂が基本形となっていることからも証明できる。

犂先押さえ木の誕生　犂先を対地角40度前後という急角度で大地に突き立てた場合、犂先の先端は大地に突き刺さって容易に前進できないのに対して、犂先の後端は犂身に嵌められていて牛の強い力に引かれて前進しようとする。すると犂先には大地に躓いて先端を軸として前に倒れ込もうとする大きな前倒力がかかって、犂先は犂身から剥がれ落ちそうになる。これを「犂先の前倒剥がれ現象」と呼んでおこう。犂先の対地角が40度前後という急角度接地犂につきまとう難問である。そこでこの犂先の後端が持ち上がらないよう、犂柱にあらかじめ嵌め込んであった長板で犂先後端を押さえつけるのが「犂先押さえ木」で、押さえた状態で犂先押さえ木のすぐ上の位置で犂柱に鼻栓を打って押さえ木が上がらないようにしている。この犂先押さえ木で犂先後端をしっかり押さえ込めば、犂先は対地角40度前後の急角度を保ったままでも前進できるので、無事大地は耕せるのである。

この犂先押さえ木はF図のようにクッチェンイにも時折り採用されていて三角枠犂のヨンヂャンやクッチェンイでは必須の部品であるが、これは漢人の曲身三角枠中床犂を直材構成の三角枠犂に置き換えて犂先が40度前後の急対地角になった初代ヨンヂャンの誕生と同時に必須の部品として生まれたと考えられる。

V　クッチェンイの誕生

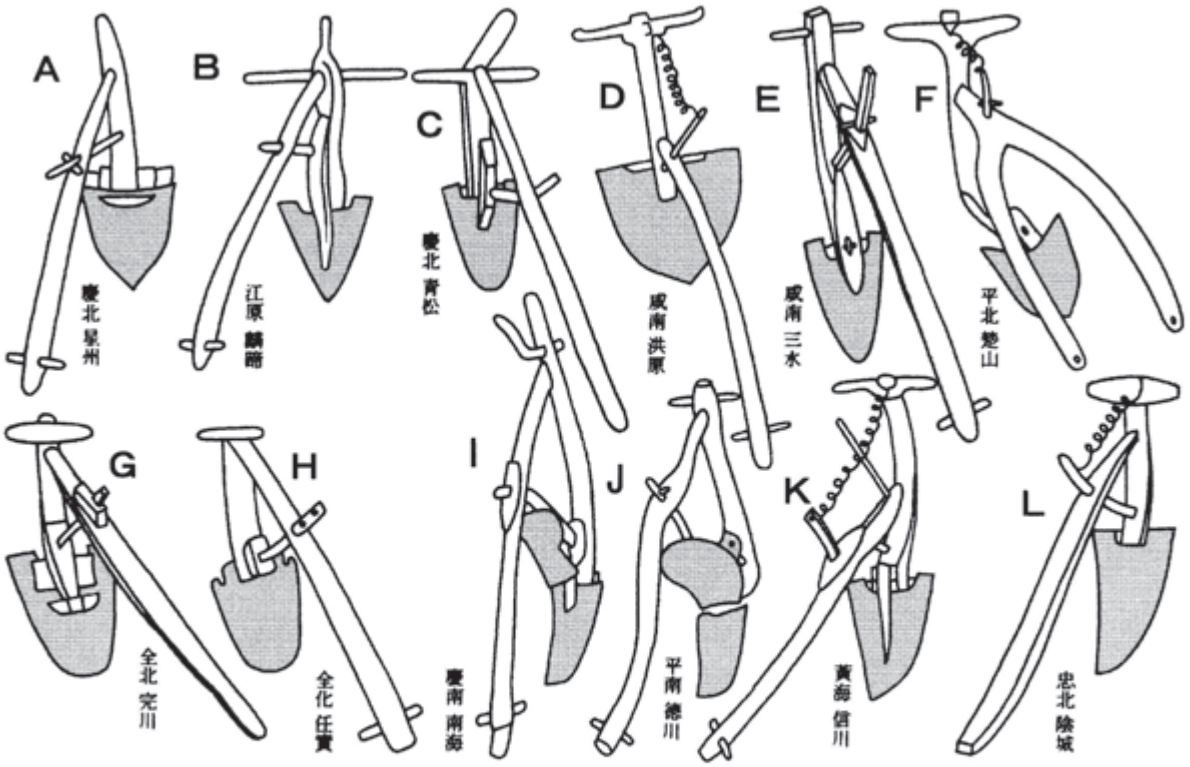
クッチェンイの誕生　では引き続いてクッチェンイの誕生経緯を見ておこう。図5 F図は『韓国の農機具』図15のモノクロ写真をもとに背景や人物を除去してトレースした一頭引き三角枠無床犂のクッチェンイで、ヨンヂャンの一頭引き版として改良されたものである。朝鮮半島でも中国本土でも北部は遊牧社会に近く、家畜の飼養頭数も多くて二頭引き犂が主流となるが、南下するにしたがって家畜頭数も減って一頭引き犂が主流となる。ヨンヂャンは朝鮮半島北部の楽浪郡のあった平壌付近で開発されたと考えられるが、南に伝播する過程で一頭引き犂が求められるようになり、ヨンヂャンをベースに南方版としてクッチェンイが誕生したと考えられる。この点を図5のD図とF図を見比べることで確認しておこう。

まずDのヨンヂャンもFのクッチェンイも直材3本の組み合わせによる三角枠無床犂で共通していて、犂柱下端の釘頭状加工も共通していて、クッチェンイがヨンヂャンの一頭引きバージョンとして誕生したことを物語っている。二頭引き犂が一頭引き犂化することで犂轅は短くなり、二頭引き犂は犂轅は牛の首木に繋ぐので斜め上方に伸びるが、一頭引き犂では首木と犂轅先端を繋ぐのが引綱なので、牛が歩み始めると犂轅先端は押し下げられ、力点にあたる首木位置と作用点にあたる犂先先端とを結んだ目に見えない「力の作用線」上に牽引点がきた状態で定姿勢走行が可能となる。そのため一頭引き犂無床犂の犂轅は「下降直轅」が特徴となり、それにともなって犂体は前に倒れて犂先はヨンヂャンよりもさらに急角度で接地することになる。犂先を急角度で地面に突き立てるとすでに述べたように「犂先の前倒剥がれ現象」が起きるので、犂先押さえ木がここでも必須となる。

犂先押さえ木を楔で締める　F図の犂先押さえ木を少し詳しく見ていこう。犂先押さえ木は犂身とは少し隙間を空けて取り付けられ、犂柱に鼻栓を打ってこの位置より上に行かないように押さえている。注目されるのは犂先押さえ木の上端部分で犂身との間に楔が打ち込まれていることで、耕起作業中に犂先押さえ木の押さえ力が緩んできたと感じたら、近くにある手ごろな石や木片をハンマー代わりに使って楔を犂先方向に叩き込めば、犂柱の鼻栓を支点にして犂先押さえ木の下端は犂身に強く押し付けられるので犂先上端をしっかりくわえて犂先の前倒剥がれを押さえ込むことができる、という仕組みになっている。

ここで新納氏のクッチェンイの説明を見ていこう。

新納氏のクッチェンイ解説　新納氏はクッチェンイについて、①クッチェンイの分布地域は京畿道、江原道



A・B・G・H・L＝クッチェンイ　C・D＝ヨンチャン　E・I・J・K＝チェンギ　F＝双轅犂

犂先押さえ木のある犂＝B・C・E・F？・G・H・I・K

（李春寧 1989 に加筆・加工）

図６　朝鮮半島各地の在来犂

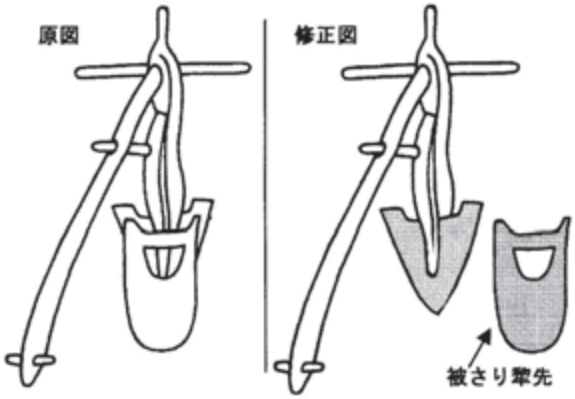


図７　『李朝農業技術史』Ｂ犂の解析

以南の畑作地帯や山間部。②一頭引きで犂ヘラはなく、耕地が狭く、傾斜の急な畑地の耕起に適している。③曲がりのない犂身、やや長めの直轅を犂柱で結ぶ比較的単純な作りとなっている。④犂柱は犂轅を貫き、クサビを前後に動かすことで犂轅と犂身間の角度を調節し、耕地の形状や深・浅耕にも対応する。⑤把手は犂身の中間やや上部に横棒をかんざし状に差し込み、犂身上端とこの把手を用いて右傾にも左傾にも調整が可能である、と説明している。

この④の下線部の「クサビを前後に動かすことで犂轅と犂身間の角度を調節し、耕地の形状や深・浅耕にも対応する」という部分は、クッチェンイの特徴としてあげるほど一般的なのか。クサビを前後に動かして耕深調節をするのは後出の図 10 A のホリで見られる犂評だが、このホリ図以外にはヨンチャンでもクッチェンイでも犂評を見た記憶はない。このことを確認するために朝鮮半島の在来犂の多様な形態を集めた図として知られる李春寧『李朝農業技術史』（1989）の 12 台の集合図を見ておこう。

『李朝農業技術史』の在来犂集合図　図 6 に掲げたのがその 12 台の集合図で、原図は白描画で線が複雑で木部と鋳鉄製の犂先・犂ヘラの見分けが付きにくいので、鉄製犂先・犂ヘラはグレーに彩色して見やすくした。それとともにＢ図は修正図と差し換えた。その理由は彩色にあたって詳しく見てみると、図 7 に掲げたようにＢ図の原図は通常の犂の犂先部分に別の単体の

犂ヘラを重ねて置いた図であることが判明した。おそらく担当学芸員氏が展示準備の際に単体犂ヘラを展示犂に重ねて仮置きしたことを忘れてそのまま展示してしまったが、同じ鉄色なので紛れて誰も気づかなかった。その状態で李春寧氏も重ね置きに気づかず撮影、その写真をもとに輪郭線図を描き起こして著書に載せたが、訳者の飯沼二郎氏もそれに気づかずにそのまま掲載した。かくいう私も12台集合図を何度か見る機会はあったが、大雑把に眺めていたようで今日まで気づかなかった。そこで今回、図7の修正図には重ね置き犂先を取り外した状態のB犂本来の姿と、重ね置き犂先を並べて示しておいた。

さて図6の12台集合図に戻って、説明の便宜上A～Lの記号を付した。韓国犂は不慣れだが新納氏の分類にしたがって分類をしてみた。A・B・G・H・Lがクッチェンイ、C・Dの犂轅の長いのがヨンヂャンで、Dの巨大犂先も犂体の浮き上がり効果を押さえ込むためで二頭引き犂であることを物語っている。E・I・J・Kがヂェンギで、Fは犂轅が二股に分かれた一頭引きの双轅犂である、という見立てでどうであろうか。なおD・F・K・Lの犂柱と把手の間にはコイルバネのようなものが描かれているが、これは柱柄縄締の省略表現である。

そこであらためて全体を見直してみると、犂柱部分には耕深調節の犂評らしいものは1例も見当たらない。また犂先押さえ木がかなりの犂で採用されており、B・C・E・F・G・H・I・Kの8台に及び、全体の3分の2を占めている。ただ問題はF図で、犂先の上方にあるのはE図のような犂先押さえ木ではないかと思うのだが、犂先押さえ木の先端がE図のように犂先の根元に被さっていない。あるいはトレースミスもありうるので一応犂先押さえ木付きと扱った。

A図は犂先押さえ木を使っていないが、袋状になった犂先に木部犂頭を挿し込んで、その左右の隙間に角材の楔を打ち込んでしっかり固定する方法で、このタイプのクッチェンイもよく見られる。

では次にヂェンギの誕生経緯を見ていこう。

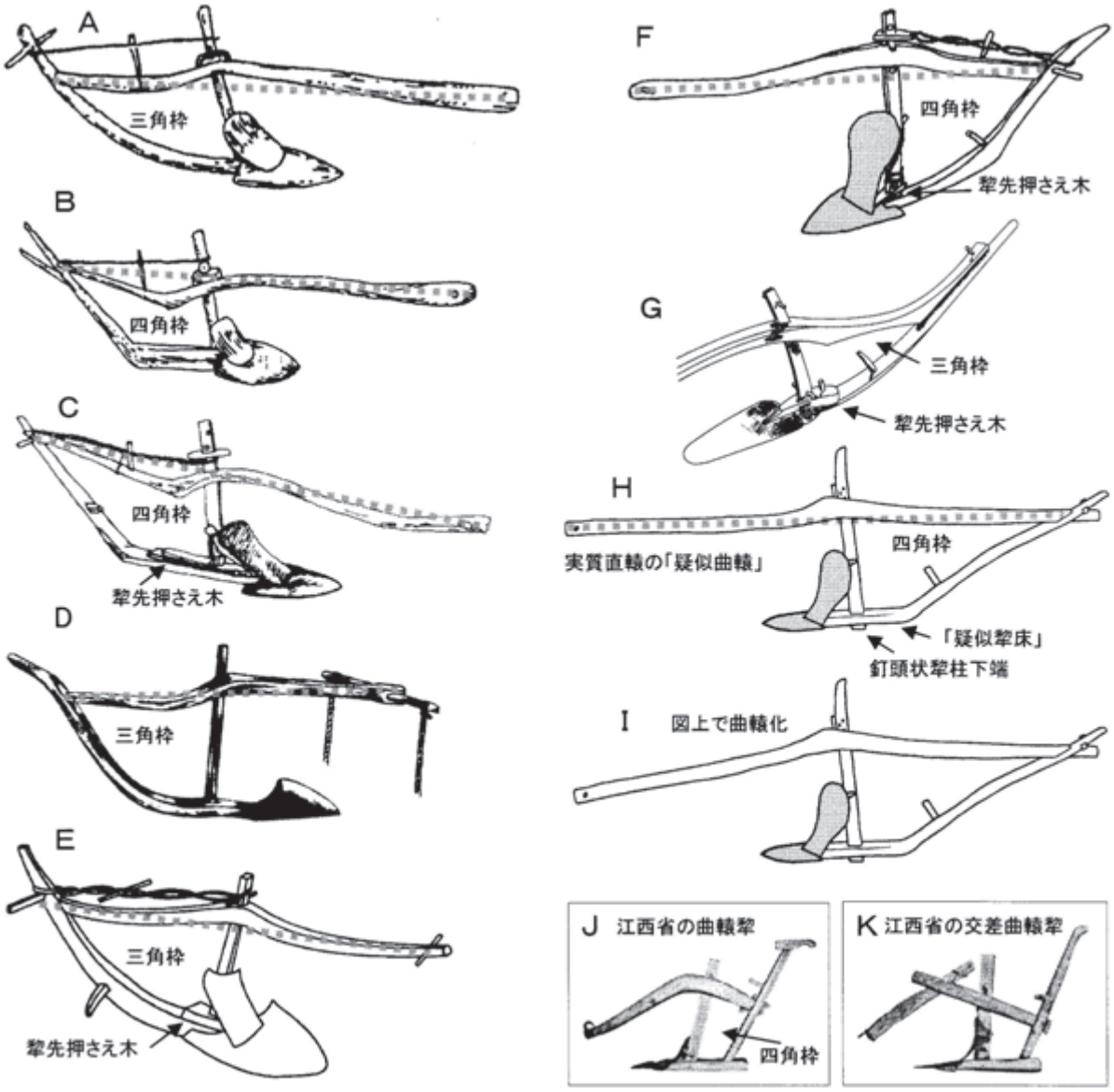
Ⅵ　ヂェンギの誕生

新納論文のヂェンギ　421年間も漢人の朝鮮半島定住が続く期間に見よう見まねで生まれたのはヨンヂャンとそれから派生したクッチェンイだけではなく、ヂェンギもまた各地で誕生したと考えられる。そこでまずヂェンギについての新納論文の説明を見ておこう。

ヂェンギは三角枠で曲轅なのか　新納氏のヂェンギの説明は先に簡単に紹介したが、その際に下線を引いておいた2点を取り上げる。それは①「やや曲がりのある犂身と長めの曲轅およびその両者をつなぐ犂柱によって三角枠型をなしている」という点と②「犂轅は長く牽引点を下げるために曲轅となっているのが基本型である」点で、これは事実に合っているのか。

そこで図8には新納（1998）からA・B、金光彦『韓国農器具攷』（1986）からヂェンギと考えられる犂図をC・D・E・Gの4点、『朝鮮ノ在来農具』（1925）からFの1点、それに温陽民俗博物館の調査写真から起こしたH図を加えて8点で検討することにした。なおF図は犂型を明確に示すため寸法線や数値、犂轅先の引綱と幅木は除去し、細く途切れた輪郭線は補筆し、鉄製犂先・犂ヘラはグレーに彩色して明確な図とした。H図の温陽民俗博物館犂は写真では犂先・犂ヘラは外れかけて傾いた状態で写っていたので図上で正位置に戻して示した。

まず新納氏の①のヂェンギは「三角枠型」かどうかについて。図には「三角枠」「四角枠」の区別を示しておいたが、A・D・E・G犂は犂身が緩やかに曲がる「屈曲犂身」の「曲身犂」なので三角枠だが、B・C・F・H犂は犂床部分と犂柄部分が角度をなして屈折する「屈折犂身」なので、四角枠犂というべきであろう。もともとは中国長床犂の犂床と犂柄が枘組みで四角枠犂だったのを、犂床と犂柄の枘組み部分は大きな力のかかる部分なので、枘組みが苦手な古代韓人たちは枝分かれ材を使って一木造りとすることで強い力にも堪えるような犂身を作ったことからすれば、枘組み四角枠犂に似せた屈折犂身が原型で、世代を重ねるごとに屈折犂身にはこだわらなくなって屈曲犂身も混じるようになった、というところであろう。したがって「ヂェンギには四角枠犂も三角枠犂も混在している」と現状



（AB：新納1998、CDEG：金『韓國農器具攷』1986、F：『朝鮮ノ在来農具』1925、HIJK：河野作図）

図8 チェンギは曲轅犂なのか

をそのまま記述しておくのが穏当ではないか。

次に②の犂轅について。実際のチェンギは新納氏のいうような「長めの曲轅」や「犂轅は長く牽引点を下げるために曲轅となっているのが基本型」となっているのか。その判別を助けるために、犂轅の先端と後端（轅柄交点）を淡色の点線で結んでみた。その結果は犂柱との交点（轅柱交点）付近では山形に少し高くなっているものの、両端は水平に伸びるというのが一般的で、実質的には直轅だといえる。

ではそもそも曲轅犂はなぜ犂轅が下方に曲っているのか。この点を図9の「曲轅犂の成立過程」図で見ておこう。

曲轅犂の成立過程　まず①は二頭引き犂で、犂が見えるように手前の牛は省略した。この場合は斜め上方に伸びる長い犂轅を2頭の牛の頸筋に渡した首木に繋ぐので、犂は定姿勢を保ったまま安定して走行できる。それに対して②の一頭引きに変えた場合は、牛の首木と犂轅先端に繋いだ横木＝尻枷との間は軟質の縄牽引となるので、牛が歩み始めると、犂轅先端の引綱掛けは、力点にあたる牛の首木と作用点にあたる犂先を結んだ目に見えない「力の作用線」上まで下がるので犂体は前倒して床尻が上がって定姿勢走行ができなくな

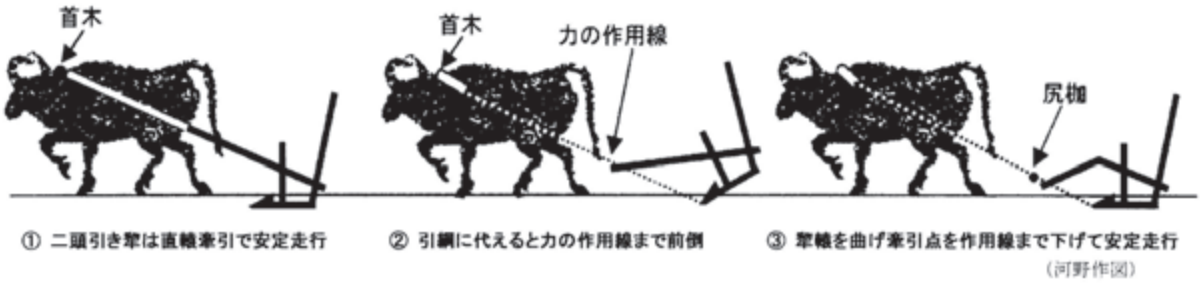


図９　曲轅犂の成立過程

る。そこで③牛に向かって斜め前方に伸びていた犂轅を轅柱交点の前位置で下方に曲げて引綱掛けを力の作用線上に下げることで安定した定姿勢走行が続けられるようにした。これが曲轅犂の誕生経緯である。図８Ｊ・Ｋの中国江南地方の曲轅犂は、この経緯をよく伝えている。

ヂェンギの犂轅は「疑似曲轅」　そこで図８に戻って、あらためてヂェンギの犂轅を見れば、韓人農民は曲轅の持つ意味が理解できないまま形だけを真似ようとした結果、山で犂轅の用材を探す場合は「直棒ではなく何となく上下にゆらぎながら前後に長く伸びる棒材」が選ばれているようで、本人は曲轅のつもりであっても実質的には直轅なので「疑似曲轅」というべきであろう。

長床犂ではなく「疑似長床犂」　犂床についても同じようなことがいえる。Ｈ図では犂柱の下端は犂床を貫いて下面から突出しているが、これはヨンヂャンやクッチェンイで見た犂柱下端の釘頭状加工である。Ｈ以外のヂェンギは斜め上から見た図なので犂轅下端の釘頭状突起は見えないが、実際には犂床部分の下面に釘頭状突起が突き出ているので、この下面突出が走行の邪魔になるため犂床下面は浮かせて走行していることになり、一見長床犂に見えながら実際には犂床は接地しておらず無床犂なので「疑似長床犂」なのである。

ヂェンギの開発はクッチェンイより後か　今回の分析で予想外の結果が生まれてきたので報告しておこう。ヂェンギには犂先押さえ木を備えたものがかなりある。図８では８例中Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｇの４例、図６ではヂェンギ４例中Ｅ・Ｉ・Ｋの３例が犂先押さえ木を付けている。ところですでに述べたように、犂先押さえ木は犂先を対地角40度前後という急角度で地面に突き立てる三角枠無床犂での犂先の前倒剥がれ現象を押さえ込むために開発されたもので、犂先の対地角が20度前後のヂェンギにはさほど必要がないのである。たとえば図８Ｃ犂は対地角15度程度と見受けられるが、それでも犂先押さえ木が付いている。このことはクッチェンイがかなり広まって「犂には犂先押さえ木が必須」という常識が広まった後にヂェンギが開発されたと考えれば辻褄が合う。本稿に取りかかる以前はクッチェンイはヨンヂャンの派生形なのでヂェンギよりは遅れて開発されたであろうという見通しで、朝鮮半島在来犂の開発順は①ヨンヂャン、②ヂェンギ、③クッチェンイという見通しをもって執筆に取りかかった。ところが先ほど述べたようにヂェンギにさほど必要としない犂先押さえ木がかなりの頻度で付けられている事実からすれば、①ヨンヂャン、②クッチェンイ、③ヂェンギという開発順が急浮上してきた。これは「ヂェンギにさほど必要としない犂先押さえ木がかなりの頻度で付けられている」という事実にもとづいての結論なので、蓋然性の高い仮説として提起して検証を待つことにしたい。

ヂェンギの祖型となった中国犂の復原　図10Ａは平安南道・京畿道・黄海道でホリと呼ばれ使われていた水田用の曲轅長床犂である。この犂は犂体は典型的な曲轅長床犂で、犂柱の後ろに小柱を立てて犂ヘラ裏側に鋳出した鈕に紐を通して結んでいるので紐留め方式の華北系の犂である。ただ次の３点の朝鮮半島的要素が加わっているので中国犂そのままではない。①犂柄の右側にクッチェンイ特有の長い梶棒を付けていること、②犂柄の下端が犂床の裏面に突出していることで、これはヨンヂャンやクッチェンイと同じく犂柱の下端を釘頭状に太く加工して、犂床下面から挿し込んで上に抜けないようにした釘頭状加工であり、③犂柱と犂柄を縄締めで固めた柱柄縄締を採用していることで、ヨンヂャンにも見られるがヂェンギではほぼ標準装備である。

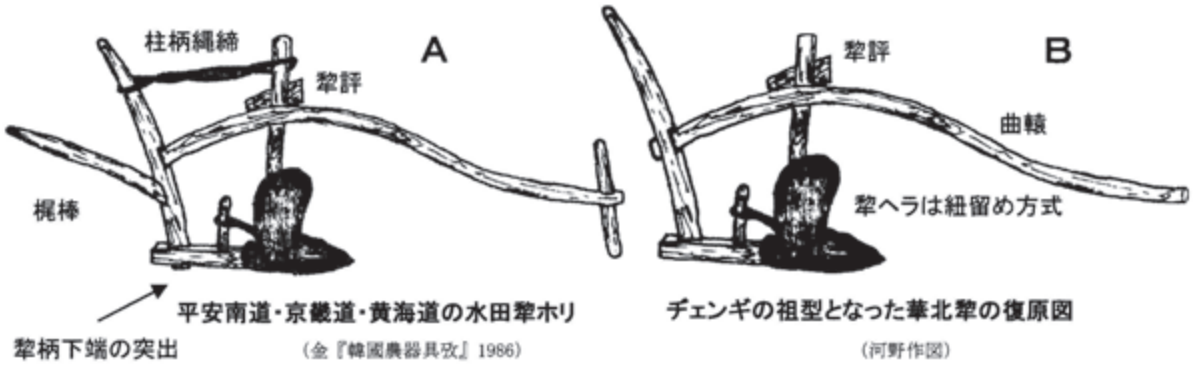


図 10　チェンギの祖型犂の復原

表１　ヨンヂャンのコピー忠実度

	項　目	二頭引き 山東・蘇北犂	ヨンヂャン	コピー忠実度
1	犂轅	直轅	直轅	○
2	犂身	S字形犂身	直材犂身	×
3	犂先	巨大犂先	巨大犂先	○
4	把手	T字形把手	十字形把手	×
5	犂柱固定法	割楔留め	釘頭状加工	×
6	—	—	柱柄縄締	×
7	—	—	犂先押さえ木	×
				29%

表２　チェンギのコピー忠実度

	項　目	一頭引き華北系 四角枠長床犂	チェンギ	コピー忠実度
1	犂轅	曲轅	疑似曲轅	×
2	犂床と犂柄	別材枘組み	一木造り	×
3	犂床	長床犂	疑似長床	×
4	犂ヘラ	右反転の曲面ヘラ	左反転の平面ヘラ	×
5	犂柱の固定法	割楔留め	釘頭状加工	×
6	—	—	柱柄縄締	×
7	—	—	犂先押さえ木	×
				0%

そこでＡ図からこれらの朝鮮半島的要素と、犂轅先端に付けられていた尻枷を除去したのが、Ｂ図の華北犂復原図である。犂ヘラが紐留め方式なのは華北犂の特徴で、爪留め方式の江南地方犂と好対照をなしている。犂柱の上部には「犂評」と呼ばれる大きな楔が前後方向に打ち込まれていて、その打ち込み加減で犂轅先端の引綱掛けを上下させて耕深調節をおこなうもので、華北犂の特徴のようである。

ところでＡ図のホリには梶棒や柱柄縄締など朝鮮半島的要素は加わっているものの、一般的なチェンギと違って華北犂の形をよく伝えているのはどうしてか。これについては２、３の分村を持つような大きな漢人村の存在が背景にあったと考えられる。村が大きくて人口が多ければ村内では華北語が使われ続けて華北文化がそのまま継承される。そうした状況が永らく続いたあと、20 世紀にいたるまでには朝鮮半島人との混血も進んで華北犂にも梶棒や柱柄縄締が加わったものと考えられる。

ただチェンギには犂評は見られないことからすれば、チェンギの模倣対象となった華北の曲轅長床犂は犂評なしタイプだったと考えられる。

Ⅶ　朝鮮半島在来犂誕生の意義

ヨンヂャン・チェンギのコピー忠実度　これまでヨンヂャン・クッチェンイ・チェンギの成立経過を見てきたが、ヨンヂャンは山東・蘇北犂形の曲身三角枠二頭引き犂の見よう見まねコピーであり、クッチェンイはそのヨンヂャンを一頭引き犂化したものなので除いたとして、チェンギもまた華北型曲轅長床犂の見よう見まねコピーであった。つまり朝鮮半島の在来犂は漢の四郡の設置にともなう漢人の大規模移住で朝鮮半島に持ち込まれた漢人の二頭引き犂と一頭引き犂を見よう見まねコピーして生まれたのがヨンヂャンとチェンギだったことになる。コピーであればモデルとなった中国犂をどの程度忠実にコピーしているかのいわば「コピー忠実度」が問題となるが、それを要素ごとに星取表型式で示したのが表１のヨンヂャン、表２のチェンギのコピー忠実度一覧表である。

まずヨンヂャンから見ていくと、犂轅は直轅をそのまま継承、犂身は複雑なＳ字形犂身を単純な直材犂身に読み替え、巨大犂先はそのまま継承、Ｔ字形把手は十字形把手に変え、犂柱下端の固定法は割楔留めは加

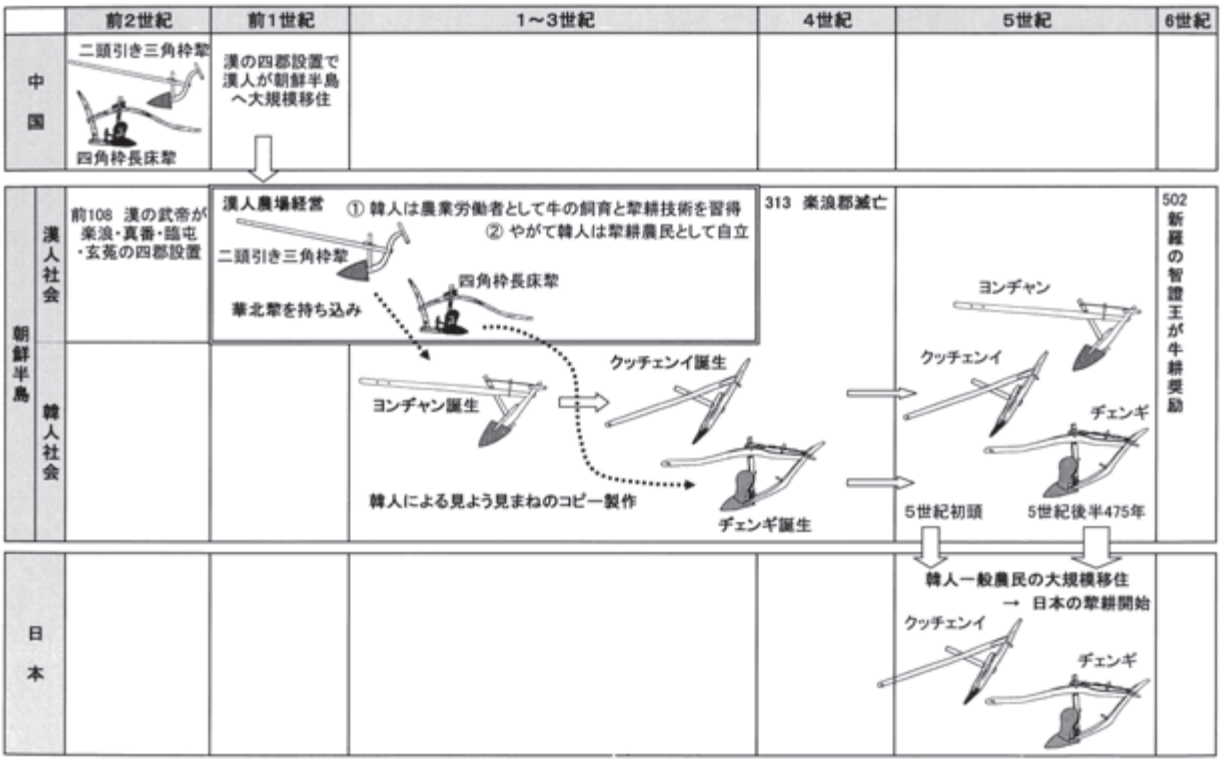


図 11　中・韓・日の犂伝播のフローチャート

工精度が要求されるので釘頭状加工に変え、枘組みに自信がなかったので柱柄縄締を加え、直材犂身で犂先の対地角が急角度になったため、犂先押さえ木を加えた。その結果７項目中で、中国犂を継承したのは２項目だけでコピー忠実度は 29％にとどまった。

ヂェンギの方は、曲轅はその意味が理解できずに形だけを真似ようとして疑似曲轅に、犂床と犂柄は枘組みが難しいので一木造りに、長床は犂柱下端の釘頭状加工で疑似長床に、犂ヘラは右反転の曲面ヘラを左反転の平面ヘラに、犂柱下端の固定法は割楔留めは加工の簡単な釘頭状加工に、枘組みに自信がなかったので柱柄縄締を加え、クッチェンイを見て犂には犂先押さえ木は必須と思い込んで加えた結果、７項目すべてで華北系四角枠長床犂とは違ったものになり、コピー忠実度は 0％となった。

自前の技術での再現製作が評価点　さてコピー忠実度が 29％あるいは 0％と聞けば、点数評価主義に慣れ親しんだわれわれ現代人はヨンヂャンやヂェンギを「駄目犂」と見てしまいそうだが、それは違う。当時の東アジアでは先進文明国の中国と周辺の朝鮮半島３国や倭国日本との技術落差は、今日でいえば欧米先進国と電気も水道も完備していない途上国ほどの落差であり、庶民の使う道具類でもおそらく切れ味のいい刃金の付いた平鑿は朝鮮半島の民衆の手にはなかった。そのため精度の高い枘組みや枘組みをしっかり固める割楔留めなどは無理なので、柱柄縄締で補ったり犂柱下端の釘頭状加工など大雑把な加工で間に合わせていた。ヨンヂャンやヂェンギはそうした韓人農民の自前の技術で作られたものであり、高度な加工で手の届かなかった中国犂を誰でも作れる犂に作り替えたことに意味があった。

これを契機に犂耕は朝鮮半島各地に広がり、やがて５世紀に高句麗の大攻勢で百済が２度の国家存亡の危機を迎えた際に起こった大量の移住民によってヂェンギやクッチェンイが日本列島に持ち込まれ、これが日本の犂耕の起源となった。その意味でヨンヂャン・クッチェンイ・ヂェンギなど朝鮮半島在来犂の誕生を、日本人研究者としてもリスペクトをもって祝福したい。

Ⅷ　中・韓・日の犂耕の流れ

中・韓・日犂耕の流れのチャート　これまで述べてきたことと、今後の見通しを兼ねて図 11 のフローチャートにまとめたので見ていこう。

紀元前2世紀末の前108年、漢の武帝は衛氏朝鮮を滅ぼして楽浪・真番・臨屯・玄菟のいわゆる「漢の四郡」を置いた。それにともなって前1世紀には4郡の郡都や周辺農村に漢人たちが大規模移住して漢人町・漢人村を建設して住みついた。その漢人たちの食糧供給のため漢人農場が開かれ、山東・蘇北系の二頭引き三角枠犂と華北系の一頭引きの四角枠長床犂が使われるようになった。漢人による朝鮮半島での犂耕開始である。この漢人農場では当初は漢人農民が働いていたが、時が経つにつれ、賃金の安い韓人農民も採用されるようになり、彼らは牛の飼養技術や犂耕法を体得して、やがて朝鮮半島に犂耕が根付く伏線となった。

古代の東アジアでは早くから文字や都市文明を持った中国とその周辺国との文化落差は大きく、一般民衆のレベルでも木工工具の道具立ても貧弱なので、精緻な加工の中国犂をそのままコピー継承することはできなかった。それでも諦めずに韓人農民たちは自分たちの手持ちの技術の範囲で見よう見まねコピーで犂を製作した。それが二頭引き犂のヨンヂャン、それを一頭引き犂に改良したクッチェンイ、一頭引き四角枠長床犂を真似て作ったヂェンギという朝鮮半島在来犂の3機種である。

この3機種は祖型となった中国犂に比べれば、ヂェンギでは犂柱下端の釘頭状突出のため地面に置いて使うことができないとか、クッチェンイでは犂先の対地角が40度前後と大きいため土の硬さの変化で時々刻々変化する前倒力を体幹で支えながら耕起するなど使いにくさはあったが、道具の不十分さは操者の技術で補って100％の仕事をやりとげるというのが道具と人との本来の関係であり、韓人農民たちは犂とはもともとこんなものだと了解して習熟に努めた結果、鋤・鍬の人力耕作に比べて飛躍的に効率の良い畜力耕作を定着させていった。

フローチャートでは1～3世紀という大枠のなかにヨンヂャン誕生・クッチェンイ誕生・ヂェンギ誕生を配しているが、本文でも触れたように、この順番で誕生したようであるが、その始期にあたるヨンヂャン誕生がいつかという証拠はまだつかめていないが、313年の楽浪郡滅亡は在来犂誕生の流れに大きな影響を与えたことは間違いないだろう。その下限については遅くとも4世紀末までにはそれら3機種は出揃っていることは間違いない。それはフローチャートの5世紀欄で示したように、4世紀末から5世紀初頭にかけての高句麗の広開土王の大攻勢による百済の危機の時期と、5世紀後半の475年の高句麗の攻撃による百済の一時滅亡の時期に、百済の一般民衆の日本列島大規模移住の波があり、その時にクッチェンイとヂェンギが持ち込まれたことが在来犂調査から確認できている。

この点はいま並行執筆中の別稿で論証しているが、簡単に紹介しておくと、日本の在来犂にクッチェンイやヂェンギがそのまま残っているわけではない。662年に天智政権が遣唐使が持ち帰った江南系四角枠長床犂をベースにした政府モデル犂を全国の郡司に送り付けてコピーさせて普及を図ったが、その結果、各地の里ごとの政府モデル犂模刻複製会では使い慣れた朝鮮系犂と政府モデル犂とを見比べて、部品ごとにいいとこ取りで組み合わせて各地で多様な混血型犂が誕生した。その後裔が各地の在来犂なので、その在来犂から政府モデル犂要素を抜き去れば、かつてその地で使われていたのはクッチェンイかヂェンギかの見分けがつく。いま進めている作業では大阪平野の河内湖低地の在来犂からはヂェンギの要素が検出され、西摂平野ではヂェンギ系の犂とクッチェンイ系の犂が混在していることが確認できており、これらは5世紀前半の持ち込みと考えられる。したがってクッチェンイとヂェンギは百済領域で4世紀末までには成立していたことになる。

もう1点、『三国史記』の「新羅本紀」の智證麻立干3年（502）、王が「州主や郡主にそれぞれ命令を下し農業を奨励させた。はじめて牛を耕作に使用した」と見える記事で、6世紀初頭の502年に「はじめて牛を耕作に使用した」とはどう見ても遅すぎるので、この史料を朝鮮半島犂耕史にどう位置づけるかが大きな課題となっている。これについては現時点では次のように考えている。

①漢の四郡のなかで中心となったのは楽浪郡であり、郡都平壌の近郊でヨンヂャンが誕生したと考えられるが、新羅は平壌から対角線的にもっとも遠い位置にある。②当時の朝鮮半島は高句麗・百済・新羅と加羅諸国がせめぎ合っている三国時代であり、牛や犂耕

技術が自由に伝播する環境ではなかった。③牛や犂耕技術は国力を支える戦略的技術であり、百済も高句麗も敵国である新羅への技術流出を警戒し阻止していた可能性が高い。④そうしたなかで遅れを取り戻すために新羅国王自らが犂耕奨励に乗り出したのが502年の手耕奨励詔と考えられる。現時点ではこのように考えておきたい。

さらにもう1点、6世紀初頭に新羅王が牛耕奨励詔を出していることからすれば、5世紀の初頭と後半に日本にクッチェンイやヂェンギを持ち込んだ百済難民の2度の大波は、新羅には向かっていなかったことになる。なぜ彼らは陸続きで移動の容易な新羅に向かわずに、流れの速い黒潮を横切る危険な航路をたどってまで日本に向かったのか。友好国である倭国は内戦がなく国内が安定していると聞いているのでそこに子供や家族の未来を託したという要素が強いが、他方では百済と新羅は幾度も戦火を交えた宿敵で、戦闘のたびに互いに親の仇、家族の仇という敵愾心を募らせていたため、新羅に向かえば略奪され殺されるという恐怖心が先立って新羅には足が向かなかったのであろうと考えられる。戦争のもたらす負の連鎖を見る思いである。

おわりに

以上、新納豊論文の明快な朝鮮半島在来犂5類型に導かれて、懸案の漢代犂の朝鮮半島持ち込みの経緯とヨンヂャン・クッチェンイ・ヂェンギという朝鮮半島在来犂3類型の誕生経緯とその意義について考察し、ひとまずの結論を得た。不十分な部分も多かろうと思うが、日韓犂耕研究者の交流の糸口にもなればと期待している。本文で触れた日本列島への渡来人による牛と犂の持ち込みに関する別稿とは「在来犂調査にもとづく犂耕伝来事情の解明」(『近畿民具』第43輯）で遅くとも10月中には刊行予定なので、興味のある方には見ていただければと思う。

また今回の執筆過程を通して朝鮮半島からの渡来人が日本列島に牛と犂を持ち込んで、その後どのように地域社会に溶け込んでいったかは日韓犂研究者の共通の関心事でもあるので、韓国の研究者も読者に想定しての報告も必要かなと思うようになってきた。これまで近畿地方や中国地方についてはかなり詳しい報告をしてきたが、その他の地域についてはまだ十分ではない。そこで今後、本誌上で九州や四国地方、さらには東日本の在来犂調査報告ができればと考えている。

参考文献

金　光彦 1969『韓国の農器具』韓国文化広報部文化財管理局

1986『韓国農器具攷』韓国農村経済研究院

2010『犂研究』民俗院

河野通明 2004「民具の犂調査にもとづく大化改新政府の長床犂導入政策の復原」『ヒストリア』188

2007「遣唐使将来唐代犂の復原と導入時期の特定」『歴史と民俗』23

2009「奈良県の在来犂－大化改新政府の畿内向けモデル犂の復原－」『商経論叢』45-1

2011a 河野通明「大阪府の在来犂－民具からの7世紀の政権支持基盤の復原－」『商経論叢』47-1

2011b「大阪府の在来犂　Ⅱ－渡来人の動向と泉南・紀北圏の復原－」『商経論叢』47-2

2015『大化の改新は身近にあった　公地制・天皇・農業の一新』和泉書院

朝鮮総督府勧業模範場 1925『朝鮮ノ在来農具』(『復刻 朝鮮の在来農具』1991 慶友社)

新納　豊 1998「朝鮮半島における在来犂とその分布」『風土・技術・文化－アジア諸民族の具体相を求めて』原隆一編、未來社

2010「朝鮮･在来犂の分布と歴史的展開」『歴史と民俗』26 神奈川大学日本常民文化研究所

渡部　武 1991『画像が語る中国の古代』イメージリーディング叢書 平凡社

2010「中国漢代画像石に見られる犂型の諸問題」『歴史と民俗』26 神奈川大学日本常民文化研究所

李　春寧 1989『李朝農業技術史』飯沼二郎訳、未來社

日本史広辞典編集委員会 1997『日本史広辞典』山川出版社